

〈児童文学この半世紀〉①

小宮山量平さん、語る

『荒野の魂』から 『風のガーデン』まで

聞き手・西山利佳



1916（大5）年5月12日長野県上田市生まれ。出版人、編集者、著述家。'47年理論社を創業、社長、会長を経て現在、同社顧問。

二〇〇九年は日本の「現代児童文学」が出版してちようど五〇年目にあたります。

一九五三年の早大童話会による「少年文学宣言」、一九五九年三月『思想の科学』に発表された佐藤忠男の「少年の理想主義について」、一九六〇年に共同執筆で刊行された『子どもと文学』（石井桃子・いぬいとみこ・鈴木晋一・瀬田貞二・松居直・渡辺茂男、中央公論社）がそれぞれに展開した主張は「伝統童話批判」という性格を持っており、従来の「童話」と決別し小説的な手法による児童文学を求めていました。この、五〇年代前半から既に主張が始まっていた児童文学の転換がことさら一九五九年をもって出発の年とされるのは、理論社による創作児童文学シリーズの刊行が始まり、それまでとは異質な作品がポリュームを持って現実になっていったことによるところが大きいでしょう。

そこで、本誌ではこの「現代児童文学」の五〇年を再考する企画の第一弾として、理論社の創業者小宮山量平さんにお話をうかがうことにしました。

十月の美しく晴れた土曜日、信州は上田駅前「若菜ビル」三階のエディターズミュージアム（注1）へお邪魔しました。以下、聞き手は私、西山です。

*